

指導資料

社会 第133号

鹿児島県総合教育センター
令和元年10月発行

対象 小学校 中学校 義務教育学校
校種 特別支援学校

「課題発見力」と「社会生活にリアルにつながる学び」に迫る授業

(資料1) 山形県庄内平野の水田と大豆の畑



※『新しい社会5上』東京書籍P.90より引用

【1】 一郎くんのクラスでは、(資料1)の写真を見ながら、米作り農家がかかえる課題について考えています。

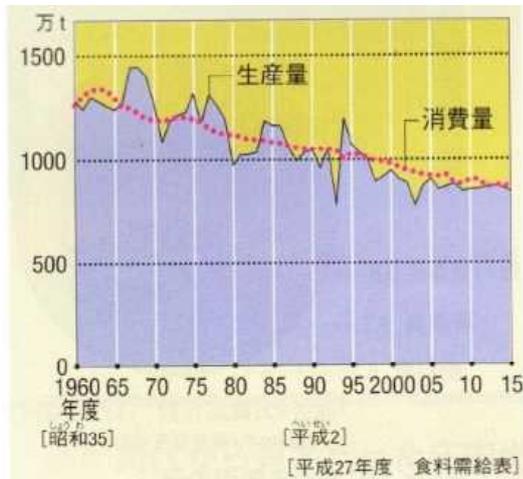
(1) どのような写真ですか。

※山形県庄内平野の水田と大豆の畑の様子

(2) 「あれっ?」と思うことや疑問に思うことは何ですか。

※米を作っている水田のとなりが、畑になっている。
※米づくりがさかんな庄内平野で、お米以外の作物が作られている。

(資料2) 米の生産量と消費量の変化



(3) 次に、(資料2)のグラフを見ながら、一郎さんと花子さんが話しています。会話の空いている を埋めなさい。

一郎：米の生産量の変化は、

※だんだん、減ってきている。
※1960年代後半、急に増えたが、その後は年によって増えたり減ったりしている。全体的には減少している。

花子：米の消費量の変化は、

※1960年代前半をピークに減り続けている。

一郎：米の生産量の変化と消費量の変化は、関係があるのかな。

花子：米の生産量が消費量を上回ると、米が

しまい、米作り農家は困ってしまうよね。

一郎：1965年以降、生産量が消費量を上回ってきたから、(資料1)の写真のように、米作り農家が を作るようになったのかもしれないね。

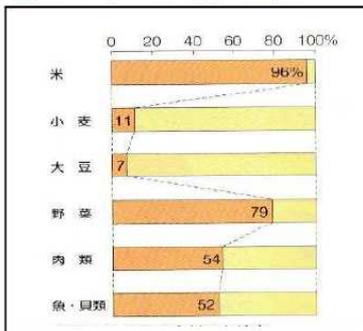
前頁は、資料から「疑問や問題を見いだす力」をみる評価問題例である。これからの社会を生きる子供たちに必要だと考えられる「課題発見力」と「社会生活にリアルにつながる学び」について、具体的な授業での手立てや新たな評価問題の提案を通して迫っていく。

1 課題解決力とともに課題発見力の育成を

資料1 平成29年度日本の食料生産についての調査問題

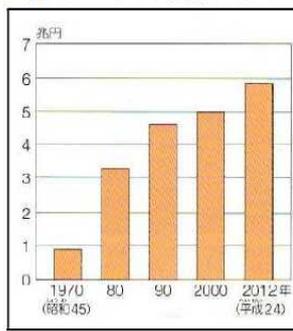
② 資料4から日本の主な食料の自給率について、米以外は低いことが分かります。また、資料5から日本の食料輸入額は増え続けていることも分かります。資料4と資料5から日本の食料自給率を少しでも上げていくためにどのようなことをするとよいと考えますか。「国内の食料生産」と「輸入」という言葉を使って説明しましょう。

(資料4) 日本の主な食料の自給率



(平成23年度食料需給表)

(資料5) 日本の食料輸入額の変化



(平成23年度食料需給表)

資料1, 2は、平成29年度と30年度に実施された鹿児島学習定着度調査の小学校第5学年社会科の問題である。どちらも、日本の食料生産に関する出題である。

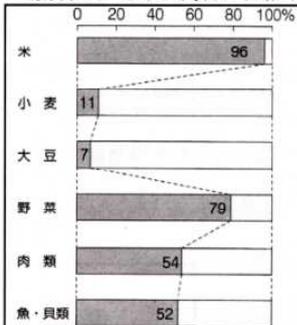
類似問題であるが、何を問われているかに着目してみる。資料1は「日本の食料自給率を上げていくための具体的な取組は何か」という課題解決力を、資料2

資料2 平成30年度日本の食料生産についての調査問題

② 資料5は、日本の主な食料の自給率を示しています。また、資料6からは、日本の食料輸入額の変化の様子が分かります。

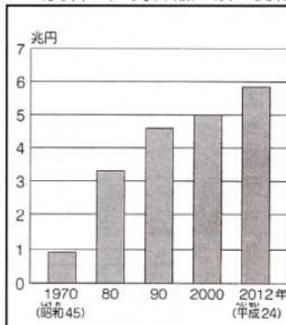
食料の自給率が低いとどのような問題が考えられるか、資料7を参考に、「輸入相手国」という言葉を使って説明しましょう。

(資料5) 日本の食料の自給率



[2011年 農林水産省]

(資料6) 食料輸入額の変化



[財務省 統計データ]

(資料7) かんぼつによってかれた、輸入相手国の畑の様子



は「日本の食料自給率が低いことによる問題は何か」という課題発見力を問われている。同じ資料も使われているため、通過率は上がるだろうと予想されたが、実際は、49.9%から41.1%へと下降した。このことから、子供たちには今後、

課題解決力だけでなく、課題発見力を高めることが求められている。

2 課題発見力を高めるポイント

(1) 資料の段階的な読み取りを授業で身に付けさせる

まず、児童が課題発見力を高めるためには、提示された資料をしっかりと読み解くこと、そして、そこから疑問を自ら見付けることがポイントになる。

上記の食料生産の問題を授業場面で考えてみる。教師が、「この二つのグラフからどんなことが分かりますか?」と問い掛けても、児童からの意見はなかなか出てこない。それでもしばらく待つと、社会科の得意な児童が答えてくれる。そして、他の児童はなんとなく分かったつもりになってしまう。そんな状況は、誰もが経験しているのではないだろうか。

それに対して教師は、授業においてどのようなことに留意すべきだろうか。

子供たちが先の問題で正答するためには、資料を段階的に読み取っていかれるかがポイントとなる(資料3)。つまり、第3段階の「疑問や問題を感じながら読む」までたどり着く必要がある。そのために、教師は日々の授業の中で、資料3のように読み取っていかれるように、問いを段階的に投げ掛けていくことが求められる。それに加えて、資料の読み

取りにペアやグループなどの協働的な学習活動を取り入れることによって、多様な見方や読み取りができるようになる。そのような経験を何度も繰り返すことで、児童は意識的にこの段階を踏んで、個々で問題を解くことができるようになる。と考える。

また、一つ一つの資料は段階的に読み取れても、複数の資料からそれぞれ読み取ったことを比較したり関連付けたりすることは難しい。これに関しても、教師が授業で、意図的に社会的な見方・考え方である「比較や関連付け、総合」を働かせるように問うことで、児童が社会的な事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察していかれるようになる。と考える。

(2) 自ら課題を見付けたり、課題を追究、解決したりする活動を充実させる

さらに、この調査問題は、現代の日本が抱える課題(食料自給率が低いことによる課題)を発見し、情報収集や考察・構想によって課題追究、解決する活動(食料自給率を上げていくための具体的な取組案の提示)に沿った学習内容が出題されているのである。

このことから、社会科創設時から大切にされてきた教科の特質に応じた学び方である「問題解決的な学習」を更に充実させることを再確認したい。具体的には、日本の食料自給率が低いという社会的な事象から考えられる課題を発見し、それをどのように解決していくかという一連の授業をデザインしていくことになる。新学習指導要領でも、小・中・高等学校全ての社会、地歴・公民科の目標に、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動」を通して、資質・能力を育成することが明記されたことから、その重要性が分かる。

3 児童の社会生活にリアルにつながる学びの工夫を

小学校社会科において、「学校で学んだことが、社会生活で役に立っているのか。それを児童は実感しているのか。」という点についても課題だと考えられる。これまで小学校社会科では、「社会を分かる」ことを重視してきた。しかし、答えが一つではない現実社会を生き抜いていくためには、これに併せて「社会に関わる」、「社会を創る」ことを目指した社会科観が求められている。社会の変化によって、現実の世界は刻々と更新され続けているからである。

そこで、学びが児童の生活とリアルにつながるように、身の回りの事柄と結び付けて考える評価問題も併せて提案する(次頁)。このような問題も授業に組み込んで活用いただきたい。

資料3 資料の段階的な読み取り方の例

ポイント



第1段階の読み取り

標題や数字を正しく読む(例:〇〇は、・・・だ。)

- ・日本の食料自給率と、食料輸入額の変化のグラフである。
- ・大豆の自給率は7%と低いな。
- ・干ばつによって育たない食料があるのだな。

第2段階の読み取り

比較や関連に着目する(例:〇〇は、△△に比べて、・・・だ。)

- ・自給率は、米は96%と高いのに比べ、小麦や大豆は多くを輸入に頼っているのだな。
- ・食料輸入額は年々増え続けているな。

第3段階の読み取り

疑問や問題を感じながら読む(なぜ、△△は、〇〇に比べて・・・なのか。)

- ・食料輸入額は年々増え続けていて、特に小麦や大豆は、大部分を輸入に頼っているけれど、輸入相手国が干ばつなどの影響で輸出できなくなったらどうするのだろうか。日本はこのまま輸入に頼っていてもいいのかな。
- ・日本の食料生産を、私たちはどのようにしていけたらよいのだろうか。

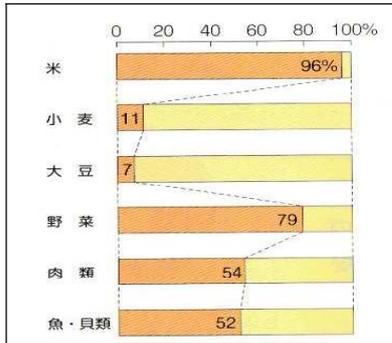


【答えが一つではない身近な課題に対し、児童一人一人が根拠をもって選択・判断する評価問題】

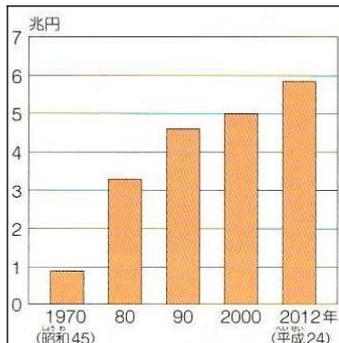
【1】 悠太くんのクラスでは、「これからの食料生産とわたしたち」の学習を進めていく中で、食料自給率に対して、意見が分かれました。そこで、聞いている友達が納得するように、討論をすることになりました。以下の条件に沿って、自分の考えを説明しましょう。

あなたは、これからの日本の食料自給率について、どのように考えますか。資料1～資料6を活用して、これからの日本の食料自給率について、「上げるべき」、「今のままでよい」、「どちらとも言えない」のいずれかを選び、○で囲みましょう。そして、その理由を書きましょう。その際、「生産者の立場」で考えたのか、「販売者の立場」で考えたのか、「消費者の立場」で考えたのかを明らかにして、根拠にした資料を基に説明しましょう。

(資料1) 日本の主な食料の自給率



(資料2) 日本の食料輸入額の変化



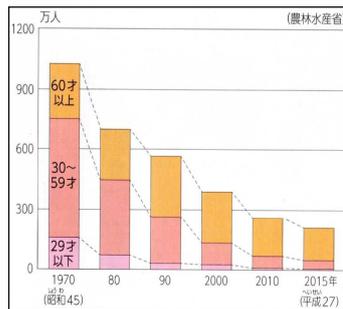
(資料3) 干ばつによって枯れた、輸入相手国の畑の様子



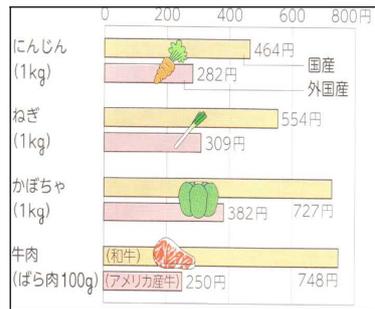
(資料4) 産地直売所で売られている商品



(資料5) 農業で働く人の数の変化



(資料6) 国産と外国産の食料の値段



<p>日本の食料自給率を</p> <p>上げるべき</p> <p>今のままでよい</p> <p>どちらとも言えない</p>	<p>【理由】</p> <p>※解答例としては、どれを選択してもよい。ただし、生産者・販売者・消費者それぞれの立場に応じて、根拠となる資料を挙げ、その事実から考えられることを、論理的につなげて述べられているかで判断する。</p>
---	--

【2】 さくらさんは、2月の節分で恵方巻きを食べました。次の日、売れ残った恵方巻きが大量に捨てられていることを新聞で知り、びっくりしました。調べてみると、この問題は「食品ロス」と呼ばれ、最近日本で問題になってきていることが分かりました。

2014年度の資料では、日本の年間の食品廃棄量は、約2800万トンで、このうち、売れ残りや期限を過ぎた食品、食べ残しなどの「食品ロス」は約620万トンとされています。これは、世界中で飢えに苦しむ人々に向けた世界の食料援助量（年間約320万トン）を大きく上回る量です。この問題について、「消費者の立場」と「販売者の立場」から考えられることを書きましょう。

※解答例としては、消費者と販売者の両方の立場から考えられることを根拠を明確にして書くこと。現状の課題や食品ロスを少なくしていく方策だけでなく、消費者としての意識の低さや販売者としての難しさ（節分など社会生活上の慣習や利益を追求していく上での必要感など）に触れるのも可。

ー引用・参考文献ー

○ 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』平成29年、日本文教出版

○ 鹿児島県教育委員会『鹿児島学習定着度調査結果報告書（平成29年度版、平成30年度版）』（教科教育研修課 中熊 信仁）

